

安珍は、ドギマギして答えられない……。

「ハハハ……わかりやすい奴だ……。」

増皇は、楽しそうに笑った……。

安珍の顔が歪んだ……。

「そうです。私は、清姫を愛してしまつた……。しかし、私は、僧です。おまけに、あの娘は、まだ子どもなのです……。それなのに、私は、あの娘に対して、許されない気持ちをいただいている……。」

安珍は、思わず苦しみを吐いた……。

「おぬしは、言っておつたそうだな……。熊野の神は貴賤を問わずと……。どんな立場の者であろうと……。人を愛することに、何を恥じらう事がある？

人を愛するのは……。大切な事だぞ……。愛しているという事に許されない事などがあるか！……。かえつて……。その娘に会つて……。そして……。愛している……。と伝えるがいい……。」

増皇は、恥ずかしくなるような言葉を……。大真面目な顔をして言った。

「……。そうだ！……。おぬし……。いいものをやろう！」

というと、傍らの従事の僧を呼び、何やら耳打ちした。

従事は、一旦、退席すると、しばらくして、戻つて来た。

手に何やら持つている……。

増皇は、それを従事の手から受け取る……。

安珍を近くまで呼ぶと……。それを自ら、手渡した。

何か……。植物の種子を頭にした和紙の人形である。

「これが何かわかるか？」

「……。さあ？紙の人形だという事は、わかりますが……。」

「ナギ人形だ……。椰の実を頭にしている……。」

椰（ナギ）は、熊野の神木である。日本を造つたとされる神、イザナギを表わす……。葉っぱは、一見、サカキやネズミモチのような鋸歯のない広く丸い普通の葉である……。しかし、よく見ると、普通の葉っぱに見られるはずの葉脈がない事に気付くだろう……。というより、全体が繊維のような葉脈で出来ているのだ。

実は、ナギは、一見、広葉樹のような葉をしているが、マツやスギのような針葉樹の仲間である。

葉全体が、葉脈で出来ているため、縦には簡単に裂けてしまうが、横方向には強く、破るのは容易ではない……。そのため、別名を弁慶のチカラシバなどとも言……。しかし、この時は、まだ、そういう風には呼ばれていなかった……。

弁慶は、第21代別当である湛増の息子であると伝えられている……。ちなみに、増皇は、この数年後……。第8代の別当職につく……。だから、この時、弁慶は、まだ、遠い未来の人物である。

